# Gut と Böse に就いて

## ——カント・ヤスペルスを通して

## Über Gut und Böse

## ——bei Kant und Jaspers

大　木　二　郎
Jiro Oki

Da trat Petrus zu ihm und sprach : Herr, wie oft muß ich denn meinem Bruder, der an mir sündigt, vergeben?

Ist's genug siebenmal?

Jesus sprach zu ihm : Ich sage dir: nicht siebenmal, sondern siebzigmal siebenmal.

—Matthäus 18～21.22

聖書の示すこの言葉に接するたびにわれわれは厳粛にならざるを得ない。出発点に戻って善悪の概念に就いて新しく考へねばならないし，又 Ich bin ich selbst, aber als schuldig. (Jaspers : Philosophie. s. 508) の負目も意識も容易には実感し得ないからである。特に Allein von dem Baum der Erkenntnis des Guten und Bösen sollst du nicht essen. (Altes Testament) の善悪は神の言葉でもあるからである。

兄弟の Sünde に対して七度を七十倍するまでという言葉は，どのように赦すことであると理解したらよいのであろうか，同時に罪に対する前に，われわれは Gnt と Böse をどのように考えるべきなのであろうか。厳しい道徳律の前に赦しということが可能になるためには何が用意されなければならないのであろうか。このような疑問をもって，カントの道徳的な真の善，あるいはヤスペルスの形而上学的段階における善の考え方に接した場合，宗教的な立場を背景にして，カントとヤスペルスは如何なる点で一致し，又如何なる点で分離しているかが当然明確にならなければならない。

両者の Gut と Böse の解釈を経由して，再び聖書の言葉に相対する時，Sünde のもつ意味は更に新しい解釈を要求するかも知れないのである。聖書の言葉をモメント moment としてわれわれはまづ Gut と Böse の問題を考える。Adel と Schlecht の区別なりとする Nietzsche の考え方は一応括弧に入れてである。

## (I)

カントは道徳形而上学の基礎づけの Übergang von der gemeinen sittlichen Vernunfterkenntnis zur philosophischen の最初の箇所において，常識の立場において Gut と呼ばれている現象から出発して，die Talente des Geistes として挙げられる頭脳の明晰とか判断力が鋭いということは確かに「よいもの」であり，又 Temperament として考えられる勇気，持久力も「よいもの」であり，更に

は，Glückseligkeit と呼ばれる権力，富，健康は「よいもの」として認められているのである。しかしそれらが善き意志 guter wille に裏づけられなければ悪にも顚落し得ることを指摘する。即ち「悪しき意志」に用いられれば悪 böse となり得るのである。

kant はこの der natürliche gesunde Verstand がすでに知る処の善意志の概念を哲学的認識にまで高めようとする。この高まる（erheben）ということはわれわれの行為が aus Pflicht かあるいは aus Neigung を区別することによって道徳的善の段階を形成しようとすることなのである。

例えば自己の幸福を確保する義務と自己の幸福への愛著も常に同時に結びついている。この愛著のある限り幸福追求は義務から出た行為か否かは解らない。幸福を欲しない立場でしかも幸福促進の努力をする時初めてそれは aus Pflicht としての行為であることが明白になる。

聖書の Du sollst deinen Nächsten lieben und deinen Feind hassen. Ich aber sage euch: Liebet eure Feinde, の句は，この立場で解せられなくてはならない。

何故ならば愛著としての愛が命令として成立し得るためには義務としての愛とならなければならない。感性的愛がないに拘らず，しかも敢て愛するところに，善が高められるのである。

カントは義務の概念を立脚点として善についての価値の段階づけを試みるのである。即ち実際的，現実的有用性を充たし得るものは「よいもの」ではあるが，幸福を得るために最も適当な手段を選ぶ技能は利巧 klugheit と呼ばれ得るものである。技能練達の規律 Regel，利巧の忠告 Ratschlag の意味における命令のもとに行はれる善は bedingt なものである。

この技術的，実用的な段階は手段的なものでしかなく，真に道徳的善とは称し得なくなる。これに対し Unbedingt な普遍妥当的な必然性を伴い定言的な命法による行為が真の意味における道徳的善となり得るのである。

周知の如くカントは定言命法と仮言命法（kategorische imperativ, Hypothetische imperativ）を区別し，価値ある善は前者によるものとする。

しかも，カント Pflicht ist Notwendigkeit einer Handlung aus Achtung fürs Gesetz という時の Gesetz は定言的なそれをいうのである。ここに道徳的常識から哲学的認識へと移行する善の概念，段階が示されているのである。更には形而上学的な意味への善の概念が示されているのである。

善がこのように Wollen に止まらず Sollen にまで高められるとするならば，当然，定言命法の成立可能の根拠が示されなければならない。そのために，カントは実践理性の Postulat として，意志の自由，神の存在 Dasein Gottes，魂の不死 Unsterblichkeit を道徳法則の ratio essendi とし，逆にまた自由を認識するために道徳法則は根拠 ratio cognoscendi となることを提言する。これが所謂カントのいう Primat der r. pr. V, のことなのである。

かくしてカントにおいては Legalität としての善と Moralität としての善との二段階が考えられている。

このために理性の真正の職分は他の意図における手段としての善なる意志を産出するにある。それはしかも最高の善であって他の一切の善の bedingung であり，総ての幸福に対する希求でさへもの

bedingung でなければならない。

カントは具体例としてこの段階の識別を，krämer としての pflichtmäßig の吟味，又生命保持について pflichtmäßig の場合と aus Pflicht としての真正の価値の比較，更には wohltätig，更にまた Glückseligkeit を sicher にすることの義務の問題を通してわれわれに提示する。この段階の識別がわれわれに如実に示されるのである。われわれはカントの論理的叙述の裡に，これらの段階を理性的に認識せざるを得ないのである。

Legalität と Moralität の問題にしても，自己目的的に善い意志とは，義務に適った行為を意志する場合にではなく，一切の感性的衝動を断ち切り義務からの行為そのものを行為者自身が意志しその義務に対する Achtung から意志する場合にのみ Moralität は成立するという主張は，実存的暗さをもたない。

「汝なすべきが故になし能う」の気負ったいい方は理論的正当性の裡に安定しているのである。Die Religion innerhalb der Grenzen den blossen Vernunft の著作の示す如く，神を要請しても，その神によってあるいはよりすがって善を実現するというのではない。善の存在根拠としての意味においてである。信仰のために，知性の場所をあけるという表現も，理論にすぎない。渇く鹿が谷間の水を希求する如くには善をなし得ない弱さを訴えるのではない。われわれの人格における人性 die Menschheit in unserer Person はわれわれ自身にとて神聖でなくてはならない。

われわれは道徳法則の主体であり，己れの普遍的法則に従って，必然的に，自己の服従すべきものに同時に一致し得るのである。

即ち自由意志が神的なるものの根底に存するという意味の神の要請理論があるだけである。カントの Rigorismus は同時に人間理性への自信ともなり得るのである。

道徳法則の神聖さと同時に，知りつつもなし得ない人間の弱さとか，悶えによる Dilemma は問題にされていないのである。人間の弱少さは Neigung によるものであり，理性的認識により克服可能と考へられている。正しさを行わんとして，実際には逆の方向に向う自己を如何にせむの聖者の言葉は考へられていないといってもよい。もしカントをこのように解釈することが許されるならば，実存の立場において善悪の段階を考へるヤスペルスにおいてわれわれはカントとの相違をどのように見出し得るであろうか。

ヤスペルスにおいても tun sollen と命ずるが故にわれわれは為し能うと主張されるのであろうか。カントの場合，善悪観は Rigorismus の名のもとに非難のまととなるが，人間の有限性についての real な洞察に裏づけされている故に，妥協が許されないのである。しかしヤスペルスにおける，限界状況（Grenz situation）の主張の如く絶望挫折を通しての自己自身の新しい自覚という深刻さは用意されていない。

カントは人間を理性において神にまで高めている。理論的要請として autonomie に道徳法則を確立し得る可能性を有するものとして。

つまり感性が理性に服さなければならぬ限りでは，人間は偉大ではないが，同時にその支配が，

外ならぬ人間自身の内なる理性による点において人間は尊厳であり得る。ではヤスペルスは，Einfuhrung in die Philosophie(1)においてまづ如何なる善悪の考へ方をするのであろうか。と同時にDas radikal Böse bei kant (2)の著作における如くカントの善悪に対しての概念の解明として，

1．Was ist das radikal Böse?

2．Wie geschieht eine mögliche Befreiung aus diesem Bösen?

3．Was bedeutet das radikal Böse für die zweideutig so genannte philosophische Religion? の段階的方法を考へているヤスペルスは，kant の考へ方を超えているのであろうか，超えているとは如何なる意味においてであろうか。

あるいは解決のないものとして，この (2) の著作の末尾に示されるような意味においてであろうか，即ち，Die groben philosophen bleiben, bleiben Ursprung einer unabsehbaren, besseren Aneignung. という。ヤスペルスの善悪についての (1) の著作に示される考えは (2) の問題の答えともなっているのである。

## (II)

第一の段階においては Gut と Böse の関係は das moralische な関係である。ここでは，sittliche Gesetze に従うという意志による直接の衝動が支配している。カント的にいうならば，Pflicht と Neigung とが対立する立場である。

従って Neigung や sinnliche Antriebe，この世の快楽や幸福に無制限に耽溺することは悪と見做される。現存在的幸福を非難こそしないが，それを道徳的価値の Bedingung の下に置く生活は善である。

第二の段階においては Gut と Böse の関係は das ethische である。Motiv の真実さである。

この事は実際に於いては Unbedingt なものが Bedingt なものに依存するという Bedingungsverhältnisse の顚倒に於ける不純性と Unbedingt なものの純粋性とが対立する立場である。即ち Neigung に従うのみの弱さに対し，それをカントが理解した如く，善が何らの損害も，もち来らずまた余りに多くの出費でもない限りにおいてのみ，善を行なうこと，抽象的に言えば，道徳的な要求としての Unbedingt なものが要求はされるが，善が sinnlich な幸福と欲求を無事に満足させるという条件のもとに善が可能な時においてのみ，善の法則に従順に従うというような顚倒が初めて本来的な悪と考えられるのである。すなわち条件づきであり，unbedingt にそうするのではない。この見せかけの善はいはば，善であることが果し得るような幸福な状態にある一種の Luxus なのである。

道徳的要求と Daseinsinteresse との間に葛藤がある場合，Daseinsinteresse が大なるに従って知らず識らずに全ての恥づべき行為をするのである。

逆に，Unbedingt なものを現存的幸福の諸件に服従させて成立する Bedingungsverhältnisse の顚倒から脱れ，Unbedingtheit へ皈ることが善なのである。すなわち

動機の不純性から生ずる常の自己欺瞞から Unbedingten の誠実さえ変ることであり，善とはこの厳格な意味を持つことになる。この第二の段階までは Kant の Legalität と moralität との区別に相当するのである。

第三の段階においては，Wille zum Bösen すなわち Wille zur Zerstörung とか破かい衝動，残酷な，滅亡への意志，存在するもの，価値あるものを全て破壊する虚無主義的な意志が悪と考えられて来る。Gut と Böseの関係は das metaphysische である。すなわち善悪の関係の論理性を超えた，動機の本質という問題が新しく登場して来る。カントも動機の純粋性までは問題にしたのであるが人間の実存としての立場から動機の純粋性を要求する論理に止まらず，純粋性の内容にまで立入るのである。

ヤスペルスは Unbedingt なものが bedingt なものに依存するという制約関係の顚倒を純粋性において是正する論理の立場に止まらない。人間の行為の Motiv には愛と憎しみとが対立して存在することを更に認めようとする。

愛は sein を望み，憎悪は Nichtsein を望む，愛は Transzendenz との関係から生じ，憎悪はそれからの分離において sellbstistischen Punkt に没落する。愛はこの世において静かな建設として働き，憎悪は本質的な存在を現存在の裡にくらまし，更には現存在それ自身をも破壊して仕舞うのである。

従って Neigung を追うか，義務を追うか，更に本末を顚倒するか，自己の Motiv の純粋性を守るかまでは，人間の理性の範囲内において二者択一の決断は可能であるが，愛と憎悪というわれわれの人生観の根底になるものは既に人間理性の処理出来ないものであり，Transzendenz との結合において初めて択一の決断が可能となる。

言葉を換えていえば，以上の段階は次の如くにもなる。

適法的には moralisch 人間は自己の決断を正しいものとして根拠付けようと考え，道徳的 ethisch には，自己の善意志の wiedergeburt によって，顚倒から再び自己を取戻すのである。形面上学的 metaphysisch には，彼の "Liebenkönnen" ということにおいて自己が自己に贈与されているという事を意識するようになる。

これら三つの段階の統一により，はじめて Unbedingten なものの実現が可能となる。

しかしたとえ Augustin の言の如く Liebe und tue, was du willst と強調されても，愛によってのみ生きることは，われわれにとっては不可能である。何となれば，われわれは絶えず Abgleitung と Verwechslung に陥り続けているからである。Kant の如く理性的な道徳法則の確立によって同時にわれわれの行為は愛の法則に遵い得るということにはならないのである。

われわれ有限的存在者にとっては，自分の愛に頼ることは許されないし，それを照明 erhellen しなければならない。更に自分の情熱 Leidenschaften を統禦するための自制の訓練も必要であるし，われわれの Motiv が時には不純であるために，われわれ自身を信用し得ないという困難性がある。われわれがわれわれの善と，愛に確信をもつときこそ，われわれは迷誤 lrre に陥っているかも知れないのである。従ってこのためにヤスペルスの場合はどうしても，Transzendenz との結合が，用

意されてなければならないのである。すなわち Gut と Böse の関係が metaphysisch にまで深められて考えられなければならないのである。しかも深められるとは，限界状況を経験することによって，設置したものが絶対他者であることを承認するということである。

そこに超越が可能となり，良心として絶対意識が成立し得る。ただこの絶対意識といっても Die Kommunikative Wahrheit というものを経由しなければ限界状況の問題はその真の解決に到達し得ないのである。

それぞれの限界状況に即応して，Kommunikation において真理が湧き出てくるのである。

ヤスペルスの場合は,実在的真理という意味で善悪を捉えようとする。客観的でなくかなり主観的な意味をもってくる。それだけに善悪の意味が自分のものとなって来るのである。では結論としてカントとヤスペルスにおける善悪に関する解釈の立場の差異点をどこに置くべきであろうか。

カントは香り高い調子で Rigorismus なる彼の善悪に就いての理論を(Ⅰ)の如く主張するのであるが，ヤスペルスの考へ方との差異点を特に留意すれば，次の如き理論となるであろう。

（Ⅲ）

『われわれのうちなる Gewissen は偽証を行なうことがない，意志が，理性の命ずる道徳律の遂行を Sollen, Pflicht として受けとり，Achtung Fürs moralische Gesetz から行う時においてのみ道徳的行為，真の善は成立する。

この時の行為は aus Pflicht であって pflichtmaßig とは区別されなければならない。しかも意志が義務からの行為を遂行しようとする時，その意志は einguter Wille となり，これは der Willen Gottes ともいいうるものである。』

カントは人間の善なる意志を，それが善なる意志であるという理由で，神の善なる意志と同じ高さにまで高めているといえる。

ただし在来の神学的形而上学がそのまま，保存せられるということではない。当時の西欧の市民的人間学を媒介することによって，独断的形而上学が否定されなければならなかった故にである。「神の意志」を原理とする神学的倫理学は斥けられる。善を神の意志に基づく命令であると見ることは，たとえ敬虔であり，人間の有限性を認めたものとしても，それは人間の意志にとって，他律 Heteronomie であり，人間の Würde を認めるものではない。

ヤペルスの場合は，この点においてカントを超えるのである。人間の Würde を真に確認しようとするためにはカントの理論的段階にとどまり得ないと考へてよいであろう。

カントにおいては，神存在をも要請可能な実践理性の優位性を説くことが一つの帰着点であり得たが,ヤスペルスにおいては,如何に Kommunikation において努力しても，超越者そのもの，真理そのものはわれわれには顕現することはない。『どんな Kommunikation も完成し得ないことから，また世界における真理のどんな形態も挫折することから，超越者を本来的に把握するところの思想はいわば神の証明の如きものである。真理の全ゆる意味が未完成であることを理由にして，最後的

真理の存在を前提に超越を指示する』(Vernunft und Existenz. s. 75) すなわち，カントの考へ方に接近している様であるが，真理そのものには到達し得ず，しかも Kommunikation によって不断に真理を求めざるを得ないということが神存在の証明の意味をもつと共に，証明せられた神は神ではなく，Sondern wäre bloß eine Sache in der Welt となるのである。(Einfuhrung i. d. philosophie ; iv Der Gottesgedanke) 神存在の証明に準ずるものしか考へられぬとする点，明確にカントと異なる。従って，ヤスペルスの善悪の概念規定は実存的信仰あるいは哲学的信仰を根底にして始めて可能となる如きものである。絶望と挫折を経由して新しい本来的自己を自覚した段階において善悪の解釈が深いものたり得るのである。

更にカントとヤスペルスの善悪の問題における解釈の差異を明確にするためにはカントとヤスペルスをつなぐものとしての，シエリングの考え方が顧みられなくてはならないであらう。否定的なもの，実在的なもの，普通的な思惟のうちに解消し得ぬ剰余を強調した立場が。

F. W. シエリングは (Die philosophische Untersuchungen über das Wesen der menschlichen Freiheit) において説く如く，カントにおける自由は，感性的契機の叡智的克服であったが，シエリングにあっては，悪の可能性として考えられている。

彼によれば，神はその実存の根底を die Natur in Gott にもっている。被造物は己れの根底をこの根底にもつ事によって，神から分たれるものとして Eigenwille である。

斯く，人間のうちには自由な我性 selbstheit があり，我性は神から分離し得る。普遍意志を離れて我意を強調し得るところに悪の可能性が存在する。併し悪の現実性は神の顕示にとって必要であるとされる。如何なる本質もその反対者においてこそ顕わとなるからである，とする。しかし再び旧約聖書に示される神の命令としての善悪の概念がその相貌を出し始めるのである。ヤスペルスはシエリングの考え方を人間のもつ Grenz situation として深めたものといえる。われわれは善悪に就いて考える場合依然として根底にある罪 (sunde) の問題が未解決のままであることに気付かざるを得ない。矢張り罪意識を明確にしなければ Denn das Gute, das ich will, das tue ich nicht; sondern das Böse, das ich nicht will, das tue ich. Römer 7—19 の深刻なる苦悩も表面的な理解にとどまるであらう。罪意識の問題が次回の問題となる。欲せざる悪とは神の眼から視た悪なのであるか，人倫における違反であるのか，同様に善とは神によって嘉みせられても，日常経験の世界においては価値を同様に持ちうるものなのであらうかの疑問は，罪意識の解明に俟たなければならない。

## (IV)

## 参考文献

Die Bibel oder die ganze Heilige Schrift des Alten und Neuen Testaments.

F. W. Schelling : Die philosophische Untersuchungen über des Wesen der menschlichen Freiheit.

I. Kant : Grnndlegung zur Metaphysik der Sitten.
d. o : Kritik der praktischen Vernunft.
d. .o : Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft.
K. Jaspers : Philosophie. Drei Bände.
d. o : Einführung in die philosophie.
d. o : Der Phüosophisbhe Glaube.
d. o : Schuldfrage.
d. o : Das radikal Böse dei Kant.
d. o : Vernunft und Existenz.
F. Nietzsche : Jenseits von Gut nnd Böse.
和辻哲郎：カント実践理性批判（岩波）